

スジャータの乳粥

苦行を捨てたシッダールタは、苦行が自分の求める何をも与えないということは明らかになりましたが、だからといつて覺りが開けたわけではありません。しかし、シッダールタは、ひとつ王家に身を置いていたときのような堕落した生活でも、命を削るような厳しき苦行でも、どちらの極端な道でも真理にたどり着けない、ということでした。もうひとつの道がある。その道こそ「中道」であり、後に仏教思想の基本となるものでした。一辺(極端)を克服した眞実の道です。しかし、シッダールタの身体は、この道について思惟を深めに弱りすぎていました。

「沐浴をして、休息をしよう」
シッダールタはそう決めて、田の前にある河(尼連禪河)へ入っていきました。身を清めたあと、近くの村落へ歩みを

進みました。その村はワルヴエーラー(優樓頻螺)村のセーナ部落といいました。そこは水が清らかで、美しい村でした。

村に入ると、その弱り切った青年の姿をみた村民たちは哀れに思つたのでしょう。見かねた村長は娘のスジャータに「乳粥を持っていかせました」。

「ああ…なんという美味しさなんだ」

断食後、初めて口に入れたものでした。

それから、毎日、シッダールタのもとにスジャータの乳粥は運ばれていました。体には力が満ち弱ついていました。心身は口に回復していきました。

さて、この有名なスジャータの乳粥とは一体どのようなものなのでしょうか。乳粥自体は現代のインンドでもよく食されているようです。ミルクでお米を煮て砂糖やドライフルーツなどをいれたもので、たしかに美味しい気がします。

しかし、資料によれば、彼女が出した

といふ乳粥は「千頭の牛から乳を搾り、もつとも純粹なクリームを7回

採つた」このクリームと「もつとも新鮮で、新しい水を土鍋にいれ…」

とあります。濃厚なチーズのようなものだったようですね。誇張表現か

もしませんが。

ところで、仏教では牛乳を精製する過程を乳味→酪味→生酥味→熟酥味→醍醐味の5段階に分けて、最終段階の醍醐味を涅槃と讃えます。

シッダールタが食した乳粥はきっとこの上もない醍醐味だったのでしょうか。

(つづく)



↑尼連禪河(ナイルンシャナー河)の現在の様子。この河岸で釈尊は苦行を捨て、沐浴した。

編集後記

今年は台風が多くて夏が知ら

なじつかし去り、瞬く間に冬になつてしまつたように感じま

す。そして、今年は痛ましい事件が多かつたように思いま

す。そして、今年は痛ましい事件が多かつたように思いま

す。そして、今年は痛ましい事件が多かつたように思いま

す。そして、根柢には起るべくして起る背景があり、私たちが自分の理解の範囲で予測していたに過ぎなかつただけ

なのかもしれません。来年はどのような年になりますでしょうか。

△口掌
(じょううま)



歎異抄講義第一章



教えと人

歎異抄の第二章といいますと、まず始めに思い出しますのは、曾我量深先生といふ、今日の大谷派の教えの礎を築かれた方のことです。「第一章を暗誦しなさい」とおっしゃっておられました。

曾我先生のお話は非常に独特であります。お話を準備はしないのです。して、お話を立つことは絶対絶命で立つ。と言つておられまして、壇に立つて考えながらお話をなさつておりました。

そして、もう一人、金子大栄という先生がおられます。金子先生の授業は曾我先生のそれとは全く反対であります。ご用意されたノートを見ながらお話になるというものでした。

弥陀の誓願不思議にたすけられまいさせて、往生おばとぐるなりと信じて念仏もうさんとおもいつこころのおころとき、すなわち損取不捨の利益にあずけめたまうなり。弥陀の本願には老少善惡のひとえらばれず。ただ信心を要とすとしてるべし。

歎異抄は序文、第二章から第十章、そして中序、第十一章から第十八章、後序となつており、前半と後半が明確に分かれています。

前半の十章は親鸞聖人のお言葉です。師訓篇と言います。師とは親鸞聖人、訓とは教えの意です。

後半の十一章からは歎異篇です。そのそれとは全く反対であります。先生のそれとは全く反対であります。金子先生の授業は曾我先生のそれとは全く反対であります。ご用意されたノートを見ながらお話になるというものでした。

